石ノ森章太郎の言葉を巡って
――「千の目」について

伊藤　景

はじめに

石ノ森章太郎は「言葉」に強いこだわりを持つマンガ家であった。

彼は「マンガ」に替わる名称として「萬画」を提唱している。現在においても、「マンガ」は「漫画」「まんが」「コミック」「劇画」といったように同媒体であっても呼称が統一されていない。そこで、石ノ森は「萬」の字を当てることであらゆる事象、媒体、表現を包括した「画」として「マンガ」を「萬画」へと昇華しようと試みたのだ。この言葉の響き、意味自体は、わかりやすく、また細分化され膨大化したマンガという媒体を一つの言葉で表現しようとしたときに、これ以上に当てはまる漢字はないだろう。石ノ森の言葉には、漢字の一文字においてもこだわりが存在しており、その単語自体にもこだわりを持って使用している。

長年、石ノ森がこだわって使用した言葉に「千の目」といったものがある。この言葉は、「夜は千の目をもっている」、「佐武と市捕物控」、「千の目先生」といった三作品にわたって主要な語として使われており、これらの作品は掲載誌やジャンルも異なっていることからも、石ノ森の言葉に対するこだわりを紐解いていく上で、適切な語であると考えられる。本論において、それぞれの作品にどのような意図で「千の目」が使用されているのかを確認しながら、石ノ森の思想の変遷を追いかけていきたい。

一、「夜は千の目をもっている」

石ノ森作品において「千の目」という単語が初めて登場するのは「夜は千の目をもっている」という一九六二年に『少女クラブ』（講談社）のお正月増刊号にて掲載された短編作品内である。

この作品は、主人公・梅宮紀子が平井家の娘・加代子の家庭教師として働き始めることから幕が開く。平井家では、加代子を含めた三人の子どもたちとその父親である庄一が暮らしており、元ピアニストの母親は物語の五年前に亡くなっている。父は仕事が忙しく、子どもたちとの交流が希薄なため、家庭内には荒んだ空気が漂っていたが、紀子の奏でるピアノのメロディーによって家族同士の交流が生まれ、温かな家庭へと家族が再生していく物語である。この紀子が奏でるピアノの曲が「夜は千の目をもっている」という名であり、彼女の戦死した父親が作曲したものとして作品の随所で奏でられる。その曲には詩もつけられており、その詩の中に「千の目」という言葉が登場する。この物語の鍵となる詩であるので、ここで引用しておきたい。

夜は千の目をもっている
だけど昼にはただひとつ
日がしずかにしずむとき
この世のすべてのあかりも死んでしまう[1]

夜は千の目をもっている
だけど心にはただひとつ
愛がおわりをつげたとき
いのちのすべてのあかりも死んでしまう[2]

この歌は、家族の心を繋ぐものとして、劇中でも繰り返し歌われる。特に、ラストシーンでは、庄一がかつて「百発百中の平井」として射撃の名人であったことを知る戦友から、とある人物の殺人を依頼され、葛藤の末に対象者に向かって銃を構えた際に、紀子と加代子がこの歌を歌っている。それにより、庄一は対象者を殺すことをやめ、自分に依頼をしてきた戦友と相撃ちになる。このとき、庄一の戦友である男は致命傷を負っており、息絶える前に紀子の父親であったことを告白するといったように、物語の中でも特に重要な場面である。この歌は平井家にとっても、梅宮家にとっても大切な家族の歌といえる。告白の後に娘のことを庄一に頼み、紀子の父は命を落とす。そして、傷を負った庄一の元に駆けつけた紀子は、治療をしながら彼に結婚の申し出をする。庄一は紀子との年齢差や直前に殺してしまった紀子の父のことを思い、その申し出を跳ね除けようとするが、紀子の固い意思によって否定すべきところで口をつぐんでしまう。最終場面では、紀子と加代子がこの曲を庄一の病室で歌っており、家族全員が揃っている光景は「幸せな家族」を象徴するかのように描かれている。

「千の目」が登場するこの詩は、作中において、オリジナルのものではなく「バーデロン」の作品として紀子が加代子に紹介している。ここで登場する「バーデロン」とは、イギリスの詩人であるフランシス・ウィリアム・バーディロン（Francis William Bourdillon）のことだろう。彼は「夜は千の目をもつ（The Night Has a Thousand Eye）」という短い詩を書いており、「夜は千の目をもっている」の詩は、この英詩を訳したものではないかと考えられる。ここに、該当する原文を紹介しておく。

The Night has a thousand eyes,
The Day but one;
Yet the light of the bright world dies
With the dying sun.[3]

この詩は「夜は千の目をもっている　しかし昼間は一つ
けれども明るい世界の光は死んでしまう　太陽の日が沈むと
ともに」と直訳することができよう。

ここで、「夜は千の目をもっている」に登場する詩を改めて確認してみると、「夜は千の目をもっている　だけど昼にはただひとつ　日がしずかにしずむとき　この世のすべてのあかりも死んでしまう」の部分と該当しており、後半の文章は石ノ森が順序を入れ替えているものと推測できる。

石ノ森がこの詩を原文で触れることができたのかは不明であるが、この詩の題名は、元々ジョン・リリー（John Lyly）の『乙女たちの変身』をバーディロンが参考にしたとされており、翻訳家でもあった加島庄造はこの詩について、「彼はこの題を、ジョン・リリーの『乙女たちの変身』3幕1場から取った。そこには「夜は千の目をもつ」という行がある」[4]と詩の成り立ちを分析しており、この詩によってバーディロンは有名になったことにも触れている。「夜は千の目をもつ」という言葉は、石ノ森以外にも創作者の刺激となったようで、後にウィリアム・アイリッシュ（William Irish）がジョー

ジ・ホプリー（George Hopley）名義で同様の題名『夜は千の目を持つ（NIGHT HAS A THOUSAND EYES）』で一九四五年に小説を発表している。この小説は、一九四八年には映画にもなっており、映画のメインのテーマ曲も同じ名前である。

ジョージ・ホプリーによる小説は、主人公の刑事・ショーンが川に飛び込んで自殺しようとしている娘・メアリーを助けることから物語は始まり、そこからメアリーの父にまつわる不吉な死の予言を回避するために奔走するといったものである。小説内では、ショーンに助けられたメアリーはしきりに「あれ」を恐れており、それから逃げるために川に沈もうとしていたことを告白するのだが、その正体こそが「千の眼」である「星々」のことであった。ここで、「千の眼」が初めて登場する場面を抜き出しておこう。

「どこかあれの見えないところへ連れて行って。空のかくれるところへ。あんなにきらきら――千の眼が――」[5]

彼女が病的なまでに恐れている星々は、「夜は千の目を持っている」の「千の目」の正体と共通しており、石ノ森の作品では「夜は千の目をもっている」という詩をハートの形で白抜きし、背景には幾千もの星の輝く夜空が描かれている。ハートで切り抜きがされていることからも、紀子の思いが庄一に届き二人が後に結婚するであろうことを暗示させている。（図1）

（図1）

この背景からも、石ノ森は「千の目」を「星」として解釈し、作品においても描いていたことが考えられる。また、石ノ森は『夜は千の目を持つ』を読んでいたのかは明らかでないが、この作品に触れたことがあるのではないか。なぜなら、物語の結末部が類似しているからである。『夜は千の目を持つ』でも次のようにショーンとメアリーが結婚の約束をする場面で物語を終えているからだ。

一フィートのそばにいても、彼らの声は聞こえなかっただろう。それほど小さな声で、ふたりは内緒ごとをささやき合った。たがいに相手にきかせるだけだった。夜の幼児ふたり。

「じっとして。そんなにふるえないで。きみはぼくの腕のなかにいるんだ。何日かしたらぼくはきみの夫になり、きみはもう二度とひとりになることはないんだ。じっとしておいで。星が消えてゆく、ひとつずつ。朝がそこまできている」[6]

小説においては、男性から女性へと結婚の申し出をしており、彼女を一人にしないことを誓っている。マンガでは、女性から男性へと結婚の申し出をしており、彼に静かで平穏な家庭を与えたいと、紀子は庄一の治療をしながら告げている。その場面には、庄一の子どもたちの姿も描かれているが、ここでは紀子と庄一の会話に焦点が当てられており、縋り付いて泣いている娘の泣き声は描写されていない。まるで、二人しか存在しないかのような描き方であり、『夜は千の目を持つ』と同じように、父を亡くし一人残された娘である紀子を庄一が一人にすることはないと感じさせる。

『夜は千の目を持つ』も「夜は千の目をもっている」のどちらも物語においてサスペンス要素を取り込んでいるが、主題としては「家族」を取り扱った物語であり、星が消え、夜が明けていくことで、朝とともに新しい家族の誕生が描かれているといえ、石ノ森にとって、「千の目」という単語は彼の独自の言語として使用したものではなく、詩または小説に影響を受けて作品へと生かすために利用したものであると考えられる。このように、石ノ森の初期作品においては、他者の作品から影響を受け、その作品の良いと思ったものをそのまま抽出し、単語に込められた意図をも内包した上で使用していたことが確認できる。しかし、この後、「千の目」は石ノ森独自の言葉へと徐々に変容していくこととなる。その転換となるのが「佐武と市捕物控」である。

二、「佐武と市捕物控」

前述したように、「千の目」という単語はバーディロンの詩と同様に「星」を意味する言葉であったが、「佐武と市捕物控」において登場する「千の目」は全く異なるものとして登場する。

「佐武と市捕物控」とは、主人公・佐武と按摩で盲目の市が江戸で起きる様々な事件を解決していくといった一九六六年から一九九六年まで断続的に発表された一連のマンガ作品のことであり、この作品において、「千の目」という単語は主人公の相棒として登場する市が自分の盲目の目を指して使用している。一話目の一九六六年に『少年サンデー増刊』（小学館）の春休みゆかい号に発表された「赤い猫」において、物語の冒頭にて佐武と市が碁を打つ場面で「千の目」という言葉が使用されている。その場面をここで紹介しておく。

市「だめだめ　目が見える者より　見えない者のほうがよく先が見えるんだから……」

佐武「チョッ、十八番の〝心には千の目〟……が始まった!!」

市「さよう、心は千の目を持っている……」[7]

この会話を見る限り、「千の目」という単語自体は「夜は千の目をもっている」と同じであるが、バーディロンの詩と同様に「星」という意味が、ここでは含まれていないことが分かる。また、この「赤い猫」では本文三十一頁内で、「千の目」という言葉が四回も使われていることから、作品における重要な語として設定されていたものといえる。

引用した会話を今一度確認してみると、盲目の市の「目」を示す言葉として「千の目」は使われており、「星」の意味は含まれていない。「赤い猫」以降では「首なし」と「刺青」でも「千の目」という言葉が使われているが、それ以降のエピソードではこの単語は使用されておらず、それは「佐武と市捕物控」のシリーズタイトルの前身である「縄と石捕物控」が使用されていた期間と等しい。この期間は、少年向けを意識して描かれているのか、佐武は捕縛術において「風車」や「まぼろし」といったように必殺技を使用した派手なアクションを展開しており、市のアクションも「石」を意識して碁石を武器にした演出がされている。だが、「佐武と市捕物控」になってからは、人間ドラマに焦点を当てた「物語」を重視した作品となっていることから、石ノ森として作品の鍵であった「千の目」という特殊な言葉は使用されなくなったと考えられる。

しかし、この作品が発表された当初、「千の目」には石ノ森によって新たな意味が与えられていた。それが、何物をも見通す「目」としての「千の目」である。実際に視覚情報を得る「肉眼」ではないが、人の心を見透かす目であることを考えると「心眼」を意識していたのではないだろうか。心眼といえば仏教的な用語であるが、「千の目」を考察する上で、心眼について考えてみると有名な観音の一つである「千手千眼観音」の存在が頭をよぎる。

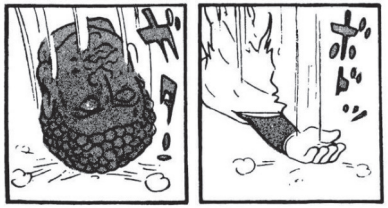
仏教において、千の目を持つ観音である千手千眼観音は変化観音の一つとして存在しており、千手千眼観音はインドラ（帝釈天）の姿をとるとも考えられている。その理由について、仏教学者である田中公明は、次のように述べている。

千手観音が、インドラ（帝釈天）の姿をとるとされたのには理由がある。インドでは、インドラは千の目をもつ者（サハスラネートラ）と呼ばれる。かつてインドラは好色で、淫行の報いとして身体に一千の女陰が現れた。そこで一念発起して修行に励んだところ、一千の女陰は開眼して千眼になったといわれる。そこでインドラの姿をとる観音（帝釈天相）も、千眼をもつようになり、それが千手千眼観音と結びつけられたのである。[8]

千手観音は漢訳経典において「千手千眼」といった名称で記されていることからも、千手観音は「千眼」をもつものとして考えられている。なお、この千眼は「肉眼」として

身体機能としての視覚のみではなく、「千の智恵の眼にかわり、千種の義をみることができた」[9]ともされることから、「千の目」は、「夜は千の目をもっている」のときとは異なり、バーディロンの詩からは離れ、石ノ森独自の思想が込められた「心」に存在する「目」として、意味が変容している。

「佐武と市捕物控」においては、江戸を舞台にしていることもあり、寺社仏閣が物語の重要な「場」として登場する。「千の目」という言葉が使用された最後のエピソードである「刺青」においては、誘拐事件の犯人たちの潜伏先として「水善寺」という荒れ寺が登場する。この御堂には、大仏が安置されているのだが、千の目を持つ市が犯人たちを斬殺した際に、大仏の首まで斬り落としている。もちろん、市が間違えて大仏を斬ったわけではなく、石ノ森はこの場面であえて、大仏の首を落としているのだ。（図2、3）



（図2）

（図3）

このエピソードをもって、千手千眼観音の有する「千眼」と類する心眼を意味する「千の目」という言葉も使用されていないことから、「佐武と市捕物控」の作品自体を仏教的な思想から切り離すことにしたものと考えられる。

次に発表された「花火」を確認してみると、それまでの謎解きが主となっていた物語構造から、人間の心情を描くと同時に江戸の情景を描くことに注力する作品へと変化しており、作品の主題が「謎解き」から「人間」へと変わっている。この後、一九九六年に発表された「青大将」に至るまで、「佐武と市捕物控」を確認すると石ノ森が人間の「心」を主題に作品を描いていることが確認できる。この「千の目」という言葉が物語から消えるとともに、「佐武と市捕物控」は少年向けの作品から大人の鑑賞にも耐えうる作品を目指すこととなった。

「千の目」という言葉から「千眼」という言葉に至り、仏教的思想を取り入れながらも、その言葉を自身の言葉にしようと試行していることが「佐武と市捕物控」からは窺える。しかし、この時点ではまだ他の思想に頼ることで言葉の意味を補完しており、まだ独自の言葉とはいえない。「千の目」が石ノ森の言葉として登場するのは、「千の目先生」である。

三、「千の目先生」

「千の目先生」は「夜は千の目をもっている」より六年後の一九六八年より『ティーンルック』（主婦と生活社）にて約半年にわたって連載された作品であり、主人公・千草カオルを中心とした超能力者たちと地球侵略を目論む異星人たちとの地球の存続をかけた戦いを描いた作品である。なお、この作品は一九七一年から一九七二年にかけてＴＢＳ系列にて放送されたドラマ「好き！　すき!!　魔女先生」の原作としても知られているが、超能力者である新任女性教師という点以外には類似点がなく、原作というよりは原案として「千の目先生」が扱われたと考えるべきだろう。

この作品で、「千の目」という言葉が初めて使用されるのは、物語の冒頭で喧嘩をしている剣道部の学生たちの仲裁にカオルが入った後、その喧嘩を野次馬として見学していた女子高校生たちに告げる意味深長な言葉としてである。ここで、どのようなやりとりで「千の目」という言葉が登場するのかを確認しておこう。

カオル「あたしは本当の原因をしってるわ」
女子学生１「？」
女子学生２「？」
夏子「おまち！」
夏子「どうも　あなたはへんだわ／きたばっかりなのにどうして　あた…いや　白河さんの名をしってんの？」
カオル「ウフフ　だってあたしは……」
カオル「千の目を　持ってるんだもの」[10]

（図４）

ここで、「千の目」という言葉を学生たちに使ったことによって、カオルのあだ名は題名のように「千の目先生」となる。また、カオルは女子高校生・夏子のことを特別視しており、常に監視するかのように見守っている。それというのも、夏子にはカオル同様に超能力者としての才能が秘められており、異星人との戦いにおいてカオルは味方となる超能力者を探していたからだ。夏子に「力」を目覚めさせようとカオルは接触を続けており、その際に夏子に向かって「あたしは千の目をもっているって／…だから　なんでも見えちゃうのヨ……」[11]と話しかけている。このセリフはカオルの「目」に注目させるように描かれており、彼女の超能力自体、「目」が誘因となっていることが描写からも窺える。（図４）そして、この目は市の「千の目」とは異なり、実際に人の心象風景を見通すことさえ可能

な「目」である。

「千の目先生」において、石ノ森は「千の目」を超能力のトリガーとして描くことで、「千の目」を独自の言葉として作品に昇華することに成功した。特に注目すべきシーンとして夏子が超能力に目覚める場面における目の描写を挙げておきたい。

熱にうなされる夏子をカオルはじっとみつめ、彼女の心に入り込もうと試みる。このとき、夏子とカオルの顔が交互に描かれるのだが、特に目に焦点を当てて描かれている。（図５）

（図５）

そして夏子に「心の目をひらいて」[12]と促すのである。「心の目」は、「佐武と市捕物控」でも見てきたように、全てを見透かす心眼のことであると同時に、ここでは超能力としてカオルのように他者と精神感応するための鍵でもあると考えられる。夏子の精神世界にカオルが干渉している際には、「目」はあまり描き込みがされておらず、彼女の心象風景として海や花畑といったように背景が変わっていく様が印象的だ。そして、超能力に目覚めた夏子の表情は今までとは異なり、自信に満ち溢れた力強い眼差しを持つ少女として描かれている。

「夜は千の目をもっている」と比較するとその単語の使い方は全く異なっており、この単語自体が物語を創造するまでに力を持った言葉として存在するようになり、「千の目」は石ノ森の言葉として生まれ変わっている。「千の目」を星として示したバーディロンの詩から、仏教における千眼として石ノ森によって意味が付加され、最終的には人の心に干渉する超能力として石ノ森の一単語にかけた思想の変遷とともに意味が変容していっていることが分かる。

ついに、石ノ森は「千の目」を自分のものとして作品内で使用することに成功したのだ。この思想の移り変わりを見限りでも、石ノ森が「言葉」に対して強いこだわりを持っていたことは明白であり、自身が納得するまで試行し続ける姿も「千の目」に対する石ノ森の思想の変遷を確認することで窺うことができた。

おわりに

石ノ森の言葉に対する態度を「千の目」を鍵として考察してきたが、彼が同じ単語を使用していたとしても、言葉に

込められた思想自体は変化していることが、「夜は千の目をもっている」、「佐武と市捕物控」、「千の目先生」の三作品から確認することができた。

「夜は千の目をもっている」においては、バーディロンの詩から影響を受けて、その詩を独自に翻訳し、理解することで「千の目」は夜空に輝く星であり、「幸せな家族」の意味も内包した言葉として石ノ森が使用していたことを明らかにした。

そして、「千の目」が登場する第二の作品である「佐武と市捕物控」においては、盲目の市の目を示して「千の目」という単語を使用しており、これは物理的な「肉眼」のことを指すのではなく、仏教における「心眼」としての「千の目」として何事も見通すことができる目を指す言葉として使用されていた。しかし、これもまた石ノ森独自の言葉というには仏教的な側面が強く、また「佐武と市捕物控」の全作品を通した上では使用頻度が掲載当初のみに限定されることからも、自分の言葉として定着できていなかったと考えられる。

最後に、「千の目先生」を通して石ノ森は「千の目」を超能力者の能力として心を見通す「目」とすることで、彼独自の言葉にすることができた。「佐武と市捕物控」において着想を得た「心眼」を踏襲しつつ、それを人の心に入り込む能力として作品内で描くことで、この「千の目」はサイコキネシスやテレパシー能力さえも含んだ超能力という新しい意味を含んだ言葉として創造されたといえる。

石ノ森は、作品を作る原動力として、既存の作品の存在を重宝していた。マンガの描き方本である『少年のためのマンガ家入門』（秋田書店）において、何にも影響を受けていない全く新しい物語の筋を描くことは困難であると次のように語っている。

ほとんどのマンガ家はその多少の差はありますが、小説や映画からヒントやアイデアや、ひどいのになるとストーリーまで、そっくりいただき、みたいなことをやっています。マンガ家の創造力不足といわれれば、なるほどその通りかもしれません。が、なにしろ遠いムカシから世界中のなん千人なん万人という〝作家〟たちが、ありとあらゆる種類の設定の、おはなしづくりに脳ミソをしぼってきたのです。新しい筋をつくるのは不可能といえるほどで、容易なことではありません。[13]

このように述べていることからも、「千の目」自体も、元々はバーディロンの詩から抽出されたものであったが、その語に仏教的な意味を与え、最終的には超能力における「心の目」として石ノ森独自の言葉としたことで、この語を自分のものとして掌握することに成功した。石ノ森は言葉一つをとっても、無意味に使用することはなく、何度も繰り返し使用し、改善していくことで独自の言葉として磨き上げていったのだ。

石ノ森の言葉に対するこだわりは「千の目」以外にも見受けられることから、今後も彼の言葉を追究していきたい。

註

1　石森章太郎『石ノ森章太郎萬画大全集　龍神沼』（角川書店、二〇〇六年五月三十一日）六十七頁
2　前掲、八十四頁
3　加島祥造『ハートで読む英語の名言　上』（平凡社、一九九六年一月十五日）七十頁
4　前掲、七十一頁
5　ウィリアム・アイリッシュ著、村上博基訳『夜は千の目を持つ』（東京創元社、二〇一八年十一月二十二日）三十頁
6　前掲、四三六頁
7　石森章太郎『石ノ森章太郎萬画大全集　佐武と市捕物控　1』（角川書店、二〇〇六年二月二十二日）五～六頁
8　田中公明『千手観音と二十八部衆の謎』（春秋社、二〇一九年二月二十日）八十～八十一頁
9　市川智康『仏さまの履歴書』（水書房、一九七九年三月）一四八頁
10　石森章太郎『石ノ森章太郎萬画大全集　千の目先生』（角川書店、二〇〇六年二月二十二日）十六頁
11　前掲、二十九頁
12　前掲、九十六頁
13　石ノ森章太郎『石ノ森章太郎のマンガ家入門』（秋田書店、一九八八年一月十五日）二七一頁

（図1）石森章太郎『石ノ森章太郎萬画大全集　龍神沼』（角川書店、二〇〇六年五月三十一日）一〇二頁
（図2）石森章太郎『石ノ森章太郎萬画大全集　佐武と市捕物控　1』（角川書店、二〇〇六年二月二十二日）一三二頁
（図3）前掲、一三三頁
（図4）石森章太郎『石ノ森章太郎萬画大全集　千の目先生』（角川書店、二〇〇六年二月二十二日）二十九頁
（図5）前掲、九十三頁

参考資料

佐久間留理子『観音菩薩　変幻自在な姿をとる救済者』（春秋社、二〇一五年十月二十八日）
西村公朝「耳と目と手の仏さん」（小川光三ほか『魅惑の仏像　千手観音』毎日新聞社、二〇〇一年二月二十日）
福田淳一編著『風のたより　No.347　石ノ森章太郎研究叙説　石ノ森章太郎作品解説集　1』（石ノ森章太郎ファンクラブ、二〇〇五年十二月三十日）
福田淳一編著『風のたより　No.357　石ノ森章太郎研究叙説　石ノ森章太郎作品解説集　2』（石ノ森章太郎ファンクラブ、二〇〇七年八月二十五日）